様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１５５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７７０２２４

研究課題名（和文）近世公武社会の奥向きの形成・展開に関する研究

研究課題名（英文）Study on the inner area of the samurai society and the aristocracy in early modern period

研究代表者
石田　俊（ISHIDA, Shun）

山口大学・人文学部・講師

研究者番号：７０７１１２２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、武家社会・公家社会双方の奥向きについて、近世前・中期を含めて検討することを課題とした。
　まず公家社会の奥向きに関しては勧修寺家を中心に検討した。そして家内部における妻の役割について新たな事実を明らかにし、また妾の出自や家における立場について事例をいくつか提示した。
　武家社会の奥向きについては、松平宣維（松江藩藩主）正室の天岳院を中心に検討し、藩主幼少期における大名正室の役割について分析した。

研究成果の概要（英文）：In this study,I considered the inner area of both the samurai society and the aristocracy including the first half of early modern period.
First,I focused on Kajujike to research the inner area of the aristocracy,and I clarified new fact about the wife and concubine of Kajuji family.
Next,I focused on Tengakuin(Wife of Matsudaira Nobuzumi,domain lord of Matsue),and I analyzed the role of daimyo wife,especially when domain lord was still in his childhood.

研究分野：日本近世史

キーワード：日本史

１．研究開始当初の背景

近世の武家社会では、男性の空間と、女性の空間は截然と区別されていた。そして奥向きのあり方については、閉鎖的な「女の世界」とみなされ、長く学術的検討の対象とならなかった。

しかし、1990 年代ころから、関係史料の発見・再発見が進んだ。折しもアメリカからジェンダー概念の導入が進んだこともあり、徳川将軍家や諸大名家における奥向きの構造や職制、奥女中のライフコース、奥女中の政治的・儀礼的役割などが解明され旧来の奥向きイメージを払拭する成果を挙げつつある。

ただし、先行研究には大きく二つの課題が残されている。一つ目は、ほとんどの先行研究が近世後期の完成された奥向きのあり方を対象にしている点である。一方、奥向きの形成・展開については、幕藩権力によってその特殊化・分離化が志向されたという重要な指摘はあるものの、具体像はほとんど分かっていない。その最大の原因は、一次史料の不足にある。つまり、奥向きについて発掘された諸史料は近世後期のものが中心であり、前・中期については、真偽不明の伝記・系譜に頼らざるを得ない状況が続いているといえる。

二つ目の課題は、先行研究が武家社会の奥向きを解明するという問題意識のもとで行われたため、公家社会の奥向きとの関係が、職制の類似性などから推測されつつも実証的に分析されていない点にある。天皇家や公家は婚姻や奥女中の融通において、徳川将軍家･大名家と密接に交流しており、武家社会・公家社会双方のあり方を検討することで、はじめて奥向きの全体像を把握しうるといえよう。

研究代表者は、これまで、女院や禁裏奥女中など、近世朝廷において女性の果たした政治的役割に注目し、朝幕関係や朝廷運営の中に位置づける研究を発表してきた。さらに近年では、江戸城大奥へも関心を広げ、大奥女中の履歴・職制などを実証的に解明している。そこで今回、研究代表者がこれまで分析してきた天皇・公家社会や幕府の奥向に関する蓄積を用いるとともに、新たに大名家の史料を分析・検討し、上記の課題を克服しようと考えた。

２．研究の目的

以上述べたように、奥向き研究の課題は、近世前・中期の分析が極めて薄いこと、朝廷や公家社会を含めた検討がなされていないこと、の二点であった。そして、それによって近世を通じた奥向きの全体像が明らかでない点が大きな問題であった。これを克服するために、本研究では、いくつかの公家・武家の家を中心的な対象事例としてとりあげ、奥向きの組織や空間構造の形成・展開を明らかにする。次に、それらを比較検討し、互いに及ぼした影響などを分析することで、近世的な奥向きの全体像を示す。さらには、得られた成果を表向きをも含めた政治構造全体の中に位置づけることを最終的な目的とする。例えば、十七世紀前半～後半にかけて、幕府では将軍の恩寵をうけた出頭人を中心とした政治から、老中制などの機構による政治へと転換したとされ、諸大名家でも同時期に藩政機構が確立していった。こうした流れと奥向きの編成がどのように関わっていったのか、などが論点となろう。

３．研究の方法

具体的な事例としては、公家では勧修寺家・石井家、武家では萩藩毛利家・松江藩松平家をとりあげる。勧修寺家・石井家については、研究代表者のこれまでの蓄積があることに加え、同じ公家であっても家として多くの違いがあること（中世から続く勧修寺家に対し、石井家は近世に成立した

新家であり、官位などの昇進過程も異なる）、また、どちらも多くの子女を天皇家の後宮に送り込んでおり、天皇家の奥向きを考察する上でも有効であることによる。毛利家については、近世を通じて勧修寺家と親しく交際しており、相互に及ぼした影響が見えやすいことに加え、研究代表者が山口大学に所属し、史料へのアクセスが極めて容易であることによる。松平家は、血縁の一門大名として毛利家を指導したことがあるのに加え、研究代表者が松江市史の近世史部会部会員をつとめ、史料を利用しうる環境が整っていることから選定した。

４．研究成果

公家社会の奥向きについては、勧修寺家の当主日記を中心に分析を行い、近世前期・中期における天皇家・公家社会の奥向きや女性の役割について検討した。その成果の一部は、「日記が語る近世史　—近世公家日記の記述から—」（倉本一宏編『日本人にとって日記とは何か』臨川書店、2016 年刊行予定）で論じた。

まず公家の家における女性の役割について、妻の役割として家蔵記録の書写があり、家への貢献として重要であったことを明らかにした。また、妾の出自や家における立場についても多くの事例を紹介し、今後の研究に資する成果を得ることができた。

次に、天皇家における奥向きの役割について、若い天皇の教育に関して、禁裏の奥向きに居住する天皇祖母が大きな役割を果たしていたことを指摘した。

武家社会の奥向きについては、特に松江松平家の五代藩主松平宣維正室天岳院（岩宮、一六九九～一七三八）について検討し、日本史研究会近世史部会においてその成果を報告した。

この報告で、特に問題としたのは藩主幼少期における大名正室の役割である。天岳院は伏見宮邦永親王女であり、また将軍家と縁続きにあたる（徳川吉宗室・徳川家重室はいずれも伏見宮家出身）。彼女は夫の宣維没後、幼少の幸千代（後の松平宗衍）を守り育てる立場にあり、家における奥向き（特に大名正室）の役割や幕府との関係を考える上で適合的な事例といえる。

まずこの報告では、宣維と天岳院の縁組から宣維が没するまでを検討した。宣維は将軍吉宗の「御内意」により天岳院と縁組し、婚礼にあたっては将軍家から資金や諸道具が援助され、それら諸道具を前面に押し出した行列が組まれた。天岳院の江戸下向後には、将軍家と松江藩との間に奥を通じた内証ルートが構築され、女使を通じた贈答儀礼や合力金の扶助が行われた。このように、天岳院の婚礼にあたっては、当初より将軍家の内縁者としての側面が強く意識されていたことを明らかにした。

次に、享保十六年に宣維が没した後、藩主幼少という状況下における天岳院の役割を考察した。天岳院は自らの遺言書において、将軍家の「御ひかり」が天岳院を通じて幼少藩主の権威を高め、家中統制に効力を発揮している旨を述べている。事実、天岳院は後見の一門大名や家老とともに表の役人の人事にも関与しており、将軍家の威光を背景に松江松平家という「御家」の中心として家中に君臨する存在であった。一方で領国統治にまでその権威を使うことは厳禁であり、表と奥の境目はその点に存在することを指摘した。

さらに公武婚の一事例として宣維と天岳院の婚礼を考察し、天岳院の立場は、宮家という出自よりも、将軍家縁者としてその威光によって支えられた側面が大きいことを確認し、近代以降に松江市が天皇家とのつながりをさがすなかで、その位置づけが捉え直された可能性を指摘した。そして展望として、将軍や御三家・御三卿が摂関家や宮家と縁組を結んでいることから、天

皇・朝廷よりもむしろ将軍家や他大名家と結びつくための公武婚という類型が想定しうるか、今後検討していくべきことを提起した。

このように本研究課題により明らかにできたことは多いが、武家社会・公家社会の奥向きの比較検討が行えなかったことは残念であった。それにともない、近世的な奥向きの全体像について十分言及できず、表向きをも含めた政治構造全体の中に奥向きを位置づけるところまで到達し得なかった。これについては、今後の大きな課題としておきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０　件）

〔学会発表〕（計　１　件）
石田俊「藩主幼少期における大名正室の役割」（日本史研究会近世史部会、2016 年 2 月 17 日、機関紙会館）京都府京都市

〔図書〕（計　１　件）
倉本一宏、佐藤信、松薗斉、石田俊、佐野真由子、奈良岡聰智、久冨木原玲、阿尾あすか、カレル・フィアラ、井上章一、富田隆『日本人にとって日記とは何か』臨川書店、2016 年刊行予定

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
石田俊　　（ISHIDA Shun）
山口大学・人文学部・講師
研究者番号：70711224

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：